



Title	育児書を読む家庭 : 18世紀ドイツの育児書の特徴の検討から
Author(s)	吉田, 耕太郎
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2015, 55, p. 61-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

育児書を読む家庭

——18世紀ドイツの育児書の特徴の検討から——

吉田 耕太郎

教育の世紀と育児書

18世紀は教育の世紀 (Erziehungsjahrhundert / Pädagogische Jahrhundert) と呼ばれる¹⁾。ルソーの影響の下、ドイツではバセドーやペスタロッチのような教育改革者が登場する。教育の世紀という言葉は、こうした新しい教育思想の展開を意味しているが、同時に、それに呼応する識字率の向上、ならびに識字率の向上を支えた印刷メディアの安価かつ安定した流通、君主主導の教育施設の拡充、ハレの孤児院のような慈善事業の形をとった教育を軸にすえた社会改善、親による教育熱の高まりと教育によって加速する社会の流動化のような一連の社会変化も含意している。たとえば18世紀ドイツの教養小説にみられるような将来を案じる若き主人公が登場するようになるのも、教育の有無によってある程度仕事を選ぶことができるようになった教育の世紀という舞台が整ってこそ可能になるものであった。

こうした教育熱の高まりのなかで、登場してきた書籍ジャンルが、今日わたしたちが書店で目にするような育児書である。育児書は、親を読者として想定し、子どもの健康や発育についてアドバイスをする書籍のことである。本稿の第一の目的は、18世紀の育児書というジャンルを再確定するために、とりわけ近接ジャンルである医学書ならびに教育書と比較することで、その特徴を確認することにある。育児書のジャンル確定を目的とする本稿は、著者が現在すすめている、歴史的な育児書の目録作成というプロジェクトの基礎となる研究である。

育児書を中心的な研究対象にすえた研究として、1971年にリディア・クンツェがドイツのマルブルク大学に提出した博士論文²⁾を第一にあげることができるだろう。クンツェの研究は、目配せしている文献の量の点で、また育児にまつわる18世紀の学説を医学史的な観点

1) Vgl. Helmut König, *Zur Geschichte der Nationalerziehung in Deutschland im letzten Drittel des 18. Jahrhunderts*, Berlin 1960. S.40; Notker Hammerstein und Ulrich Herrmann (Hg.), *18. Jahrhundert - vom späten 17. Jahrhundert bis zur Neuordnung Deutschlands um 1800*, München 2005. (Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte, 2.Bd.)

2) Lydia Kunze, *Die physische Erziehung der Kinder - Populäre Schriften zur Gesundheitserziehung in der Medizin der Aufklärung*, Dissertation, Marburg 1971.

から整理している点で、今日でも参照に値する基礎研究である。クンツェの研究では、1750年から1820年までの期間にドイツで出版された156点の書籍および雑誌記事が研究の対象になっている³⁾。

しかしながら、18世紀末および19世紀初頭に編まれた書籍目録をあらためて参照しながら、あらためてかつての育児書をリストアップし、その受容という観点から整理を試みる必要がある。というのも、クンツェの研究は、社会的な衛生政策はまずもって学校や子どもの世話という形で浸透したという医学史の立場をとるもので⁴⁾、子どもの健康への配慮が盛り込まれた育児書を、衛生観念の発生を跡付ける例証としてのみ分析しているからだ。このような受容者を外した視点では、ジェンダー研究や家族形成史⁵⁾のような隣接する研究テーマとのつながりをうまく取り入れることができなくなってしまう。繰り返しになるが、本稿の目的は育児書のジャンルを特定するための指標を検討することにあるが、育児書からよみとれる18世紀当時の育児が担っていた役割を、とりわけ近代的な家族の成立および家庭内のジェンダーの固定化という観点へと結びつく道筋を提示することができると期待している。

育児書のふたつの影響

育児書をさしあたり、子どもの健康維持に役立つもの、とりわけクンツェの定義⁶⁾に従って、乳幼児の食事（母乳や離乳後の食事）、産着ならび衣服、肌の扱い（清潔さ）、換気、運動、乳歯の扱い、歩行といった点に言及する書籍と定義したうえで、話をすすめよう。

クンツェがまとめているように、子どもの健康を扱う育児書が、（19世紀の公衆衛生のような社会政策にはいたっていないものの）衛生概念の関連していることは明らかだ。1997年に発表されたマニュエル・フライの衛生観念史を扱った研究でも、子どもは18世紀後半の衛生政策の重要な対象であり、「教育者としての医師」⁷⁾つまり医学が教育と結びついて子どもたちの衛生に関与してきたと指摘している。育児書が医師と子どもたちとの結びつきを媒介したことについては否定しないが、育児書が子どもを読者として想定した書籍ではないことは言うまでもない。育児書が、子どもを持つ親を対象とした書籍であるとすれば、育児書は、医師が執筆した医学書の一種であると同時に、同じように子どもをもつ親を読者として想定した教育書⁸⁾の一種としても位置づけることができる。

3) Ebd., S.13.

4) Ebd., S.15.

5) 例えば、M. ミッテラウアー、R. ジーダー『ヨーロッパ家族社会史 家父長制からパートナー関係へ』（名古屋大学出版会、1993）など。

6) Kunze, a. a. O., S.121ff.

7) Vgl. Manuel Frey, *Der reinliche Bürger*, Göttingen 1997, S.132.

8) 教育書のほうが育児書よりも発刊点数は多かった。18世紀の教育書についての書誌学的研究としてつぎの研究をあげておく。Ulrich Hermann, *Bibliographische Hinweise zum Studium des 18.*

子どもを育てることと、子どもを教育することのふたつの意味は、ドイツ語のErziehungという語に深く結びついている。アーデルンクの辞書の定義を引用しておこう。

Nicht nur durch Reichung der Nahrungsmittel den körperlichen Wachstum eines Kindes befördern, sondern auch dasselbe durch Unterricht zur Erwerbung seines Unterhaltes geschickt machen. [...] In engerer Bedeutung, die Sitten, das Herz, den Geist eines Kindes bilden.⁹⁾

Erziehungは大別してふたつの意味を担っている。ひとつは、子どもを育てることつまり子どもを大きくすることである。ふたつめが子どもが生きていけるようにしてやること、そこから転じて、子どもの振舞、心、精神を形作ることである。前者は文字通り子どもを育てることであり、本稿では育児や養育という語をあてることにしたい。そして後者の語義が、今日私たちが教育という言葉で理解する意味内容にあたる。当時の教育には、生計をたてるための職業技術の習得から全人格的な人間形成まで含まれている。教育の世紀のなかで整備されつつあった学校教育や職業予備学校で知識や技術を与えることもアーデルンクは念頭においていたことだろう。後者の教育への関心は、18世紀後半になると、身分、職業、ジェンダー¹⁰⁾にとって適切な使命（Bestimmung）は何かという問題を扱ったタイプの教育書が優勢になる¹¹⁾。

本論が対象としている育児書はErziehungの前者の語義を強く引き継ぐものであるが、Erziehungという語が、教育と育児の双方を意味していたように、育児書と教育書とをきれいに峻別できるわけではない。

例えば、ロホウの『子どもそれから地方の人々のための学校教科書の試み』¹²⁾は、学校また地方の家庭での使用を前提とした教科書案であるが、読み物に混じって「健康を維持するための手段」という一項目が設けられ、健康維持についての話が紹介されている。同じようにザルツマンの『理性ならざる流行の教育に向けた注意』¹³⁾では、宗教教育をはじめとする

Jahrhunderts und Erziehungs- und Schulgeschichte im Zeitalter der Aufklärung, in: Ders (Hg.), *Das pädagogische Jahrhundert*, Weinheim 1981, S.318ff.

- 9) Johann Christoph Adelung, *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart*, 1. Bd., Sp. 1959f.
- 10) 18世紀ドイツの教育とジェンダーとの関連についての研究は多数あるが、同時代の多数の教育書を一次資料としている下記のをあげておく。Vgl. Johanna Hopfner, *Mädchenerziehung und weibliche Bildung um 1800*, Bad Heilbrunn 1990.
- 11) Vgl. Fotis Jannidis, *Die "Bestimmung des Menschen" - kultursemiotische Beschreibung einer sprachlichen Formel*, in: *Aufklärung*, Hamburg 2002, S.75-79.また近年の研究としては次のものがある。Laura Anna Macor, *Die Bestimmung des Menschen (1748 - 1800)*, Stuttgart 2013.
- 12) Friedrich Eberhard von Rochow, *Versuch eines Schulbuches für Kinder und Landleute oder zum Gebrauch in Dorfschulen*, Berlin 1772, S.144-150.
- 13) Christian Gotthilf Salzmann, *Anweisung zu einer, zwar nicht vernünftigen, aber doch modischen*

伝統的な教育への批判などと並んで、健康維持の方法が批判的に検討されている。ちなみにロホウとザルツマンは医師ではなく、自らの手で学校を設立運営する教育改革の実践者であった。

同じように育児書にも、教育についての言及が認められる。なかでも「心と身体の双方を一致させて育てる」¹⁴⁾という標語とともに、早期の詰め込み教育の害を警告するものが多い。ここで批判されている詰め込み教育では、神の概念も分からないのに、聖書や教理問答の文言を丸暗記させるような、旧来の宗教教育のことが念頭におかれていた。

こうした教育と育児との重なり合いは、読者である親が子どもへ向ける関心という共通項でもって括ることができるだろう。したがって育児書には、教育書としてこれまで分類されてきたものとりわけ、上記のロホーの読本のような教育現場で実際に使用させていた読本の類もまた部分的に含める必要がある。

育児書というジャンルを考える上で、もうひとつ考えなければならないのは、医学書との関係だ。それはまず第一に、ほとんどの育児書が医学者によって執筆されているという事実からも明らかである。19世紀初頭になると、医学書の一分野として育児書の書誌情報をまとめた目録も出版されている。カール・ベルンハルト・フライシュの『子どもの病気ならびに生まれてから成熟するまでの子どもの医学的身体的教育についてのハンドブック』¹⁵⁾は、小児疾患についての知識提供を目的とした著作であり¹⁶⁾、18世紀以前から出版されてきた育児書や小児疾患をあつかった医学書を検討し、その理論偏重な性格ならびに一面的な記述について批判を加えている¹⁷⁾。フライシュは、巻末に16世紀から18世紀末までに出版された小児疾患を扱った医学書と育児書(それぞれ雑誌記事も含む)の目録を作成し、子どもの病気について104文献、育児について116文献をリストアップしている。なおフライシュは、ルソーの『エミール』も育児書としてカウントしている。1811年に出版されたカール・ブルダッハの同趣旨の文献目録には、育児(Erziehung)として44冊、食養生(Diätat)5冊、小児疾患(Kinderkrankheiten)29冊がリストアップされている¹⁸⁾。1803年のフライシュの目録より収録点数が少なくなっている理由は、時代遅れの学説を除外しているからであろう。とり

Erziehung, Erfurt 1780.

14) Christian August Struve, *Ueber die Erziehung und Behandlung der Kinder in den ersten Lebensjahren*, Hannover 1798, S.27. ただし執筆に際して参照できたのは、1803年刊の第2版。そのほか、次の育児書も参照。Johann David Busch, *Anführung des Landvolks zu der körperlichen Erziehung der Kinder*, 2.Aufl. Marburg 1794, S.59

15) Carl Bernhard Fleisch, *Handbuch über die Krankheiten der Kinder und über die medicinisch - physische Erziehung derselben bis zu den Jahren der Mannbarkeit*, Leipzig 1803.

16) Ebd., S.V.

17) Ebd., S.VI.

18) Karl Friedrich Burdach, *Die Literatur der Heilwissenschaft*, 2.Bd., Gotha 1811, S.70-80.

わけ医学書にその傾向が顕著だ。

フライシュやプルダッハの19世紀初頭の分類に従うならば、育児書は医学書の一部、とりわけ小児疾患を専門的に扱う医学書と並置されるジャンルとして位置づけられることになる。たしかに育児書で病気が解説されていることは多い。当時子どもの大病としてみなされていた、天然痘、猩紅熱、麻疹、水頭症についての記述はどの育児書にもみられるものである。天然痘の予防として一部の地域で試み始められていた種痘についての言及も時代が下るとともに数多くの育児書で確認できるようになることから、育児書に医学の発展が反映されていることはいうまでもない。

育児書と医学書の差異

育児書が医学書と部分的に重なり合っていることは明らかであり、育児書を扱うクンツェの研究では、小児疾患をあつかう医学書もまた育児書として分類されている。しかしその想定している読者の違いから、育児書には一般性ないしは非専門性という性格を認めることができる。例えば疾患の説明に専門用語であるラテン語が医学書には頻出するが、育児書にはでてこないというのは分かりやすい実例のひとつだが、医学書と育児書では、想定している読者に対応するために、構成にも大きな違いを認めることができる。

この構成の違いを、育児書と医学書を同一著者が執筆している例をあげて確認しておきたい。乳幼児の栄養摂取に関して、ヨーハン・フリードリヒ・ツェッケルトは、医師ならびに医学を志す学生に向けた『食育について』¹⁹⁾と、親たちに向けて子どもの食事全般について扱った『乳児の食事の世話についての講義』²⁰⁾という同内容の二つの著作を執筆している²¹⁾。

正しい栄養摂取が健康の礎となるという前提から、母乳の重要性、そして母乳育児ができない場合の代替食の説明にはじまり、離乳食から普通の食事へと月齢と年齢に応じた子どもの食事を扱っている点で、ツェッケルトの二つの著作のテーマに違いはない。とはいえ両書は、その想定している読者の違いから、力点の置き所は違ったものとなっている。

まず冒頭で、大人（親）が、子どもの栄養摂取に気を配ることの義務が論じられている点は双方の著作とも同じであるが、親を対象とした『講義』では、「神は、子どもたちに、日々神秘を示さなければならない。だからこそ両親に子どもたちの面倒をみるという強い欲求がそなわっていないなんてことがあるのか、親から子へのあの優しい愛情のもととなる欲求が、親たちに備わっていないなんてことはないはずだ」²²⁾と、読者としての親を説得しやすく

19) Johann Friedrich Zückert, *Von der diätischen Erziehung der entwöhnten und erwachsenen Kinder bis in ihr mannbare Alter*, Berlin 1765. (ただし本論執筆で参照できたのは1779年刊行の第3版)

20) Zückert, *Unterricht für rechtschaffene Eltern, zur diätischen Pflege ihrer Säuglinge*, Berlin 1771

21) ふたつの著作の関係について、ツェッケルトは、『食育について』の序文で解説している。

22) Zückert, *Unterricht*, S.2.

するためであろう神をつかったレトリックでもって子育ての義務を説くことからはじめている。親たちは子どもへの愛情をうまれながらにもっているのだから、親が子どもをひどく扱うという例は実際のところわずかしかない。しかし「親の無知から、知らずして子どもを不幸な状態におとしめてしまうことはある」²³⁾のだから、この本を熟読して、育児の知識を習得し、子どもたちをしあわせにしてもらいたいというわけである。このように育児の大切さを親に説得をしたうえで、母乳育児の方法、それができない場合の健康な乳母を見つける方法、さらに母乳の代替となるような粥などの新生児の食事について話が進む。

他方、医師ならびに医学生に向けられた『食育について』では、母親による（場合によっては乳母による）母乳育児は子どもの健康維持の大前提とした上で、神を持ち出して親の義務を論じるようなことはなく、「授乳することの全くできないまたは難しい母親は多くいる、また誤って理解された習慣ないしは非難に値する利己心から、はやくも出産後数ヶ月で母乳が出ないという母親もいるし、危険な病気や痛みを伴う病苦で授乳どころではない母親もいる。こうした状況をただしく考慮すれば、授乳の中断はやむを得ないということになるだろう、しかしだからといって、子どもは生後6ヶ月もたっているからといって、断乳し固形物を与えるようなことをすれば、それは子どもに対して誤った対処をしたことになるだろう」と、すぐに本題である新生児の栄養摂取へと話が進み、とりわけ月齢にあった母乳の代わりとなる飲食物が検討される。医師を読者としている『食育について』では、母乳育児の大切さを読者に説得する必要はなく、むしろ母乳を飲むことのできない子どもがいるとしたら、それこそ医師が対応すべき問題として、対処方が検討されているのだ。

専門家と門外漢の読者を対象にした二つの著作の違いは、全体の構成の点にもみとめられる。専門家を対象にしている『食育について』では、本論は、1 離乳について、2 子どもに有害な食事について、3 子どもに有益な食事について、4 子どもの飲み物について、5 子どもの月例にあわせた食事の選択と量についてと、乳幼児の食についての記述が主題となっており、乳幼児の生活環境については補足的に論じられている。

他方、親を対象とした『講義』では、すでに紹介した親の育児義務についてのべたのち、1 新生児の扱いについて注意する点、2 産着についての助言と、育児をするうえでの導入的なことからの解説が続き、そして3 乳幼児の食事一般、4 母乳が乳幼児の最善の食事であること、5 授乳が母親の義務であること、6 母乳以外の食事、7 乳幼児の睡眠、8 居住環境という具合に栄養摂取以外の育児に関連する事柄についての言及が確認できる。『講義』は、出産を控えた、また出産した親が、母乳育児を説得され、しかしそれでも母乳育児をしないまたはできない場合は、乳母探しのためのアドバイスを得られるように、離乳にいたるまで

23) Ebd., S.2.

の一連の育児プロセスのモデル提示に多くの紙面が割かれていることがわかるだろう。このように医学的な内容を扱いつつも、月齢を追って育児の段階をたどるようなかたちでのアドバイスがおこなわれているのが、非専門家を対象とした育児書の構成上の特徴であった。

構成という観点からあらためて医学書を見てみると、（もちろん程度の差はあるが）病名がアルファベット順に列記されている、いわゆる疾患事典のような体裁をとっているものが多いことにも気付く。言うまでもなく医学書では、多種多様の疾患をできるだけ多く収録することが目的とされているからだ。印刷メディアにおいて、アルファベットという配列秩序は、伝統的な記憶術や樹形図のような分類方法²⁴⁾を駆逐しながら、中立的かつ包括的に情報を列挙するための方法としてひろく定着してきた²⁵⁾。しかし病気がアルファベット順に記載されてしまうと、そもそも病名など見当もつかない非専門家にとっては、求めている情報へのアクセスはますます難しくなってしまう。

もちろん育児をする一般読者を対象とした月齢形式も最初期の育児書から整っていたわけではなかった。フォン・ローゼンシュタイン²⁶⁾やクリューガー²⁷⁾の著作は、黎明期の育児書として位置づけられているものであるが²⁸⁾、月齢にそった記述は採用されていない。例えばフォン・ローゼンシュタインの著作は、母乳や産着などの育児的な養育のアドバイスと病気の記述とが特段区分されることなく、なかば無秩序に列挙されており、必要とあれば、巻末のインデックス（ただし病名がほとんど）を頼りに、求めている情報にアクセスするよう編まれたものであることがわかる。同じく最初期の例にあたるクリューガーの著作は、ブラジル人たちは、子どもを裸のまま木綿をつめたハンモックまたは布または毛皮をあしらったカゴに入れておく²⁹⁾。北アメリカの住民は、虫がかみ砕いた木くずを入れたカゴに子ども入れておき³⁰⁾、4、5歳ときには6、7歳になるまで、母乳しかあたえていない³¹⁾と、育児にまつわる雑多な民族誌記述を列挙しており、子育てする親に向けて育児のアドバイスを

24) 一例としてあげておく。Johann Heinrich Alsted, *Encyclopaedia*, Herborn 1600.

25) Nico Dorn, *Zedlers Universla-Lexicon und das Problem seiner inhaltlichen Erschließung*, in: Ulrich Johannes Schneider (Hg.), *Kulturen des Wissens im 18. Jahrhundert*, Berlin 2008, S.186; Ders., *Die Erfindung des allgemeinen Wissens*, Berlin 2013, S.46f; Christel Meier, *Organisation of Knowledge and Encyclopaedic ordo*, in: Peter Binkley (ed.), *Pre-modern encyclopaedic texts*, Leiden 1997, pp.126f.

26) Nils Rosén von Rosenstein, *Anweisung zur Kenntniß und Cur der Kinderkrankheiten*, Gotha 1766.

27) Johann Gottlob Krüger, *Gedanken von Erziehung der Kinder*, 2.Aufl. Berlin 1752.本稿執筆で参照したのは、1760年刊行の版である。

28) フォン・ローゼンシュタインの著作は、クンツェの研究はもちろん、同時代の育児書であるリュッケルトの『食育について』やフリードリヒ・ヤーン (Friedrich Jahn, *Neues System der Kinderkrankheiten nach Brownischen Grundsätzen und Erfahrungen*, Rudolstadt 1803) でも、最初期の育児書として位置づけられている。

29) Krüger, a. a. O., S.28.

30) Krüger, a. a. O., S.31.

31) Krüger, a. a. O., S.38.

ことなどまったく想定されていない。

ゲオルク・フリードリヒ・ホフマンは、このような実用に堪えない初期の育児書を次のように批判している。「手元に偉大な医学者たちの本が手元にある。しかしそこから役立つような指南をひきだすことができるだろうか。そしてまたこうした専門書を、女性たちはいつでも役に立つものとして読むことができたり、読もうとしたりするだろうか。こうした専門書は、有益かつ重要な真理を十分に繰り返し説いているだろうか」³²⁾。育児書は読者（ここでは母親である女性）にとって、わかりやすくなければ無益であるとホフマンは断言している。つまり月齢を追った育児書の記述は、医学の専門家ではない普通の親たちを読者を想定し、子育てする親たちの利便性を考慮するなかで徐々に形作られてきたものといっでよいであろう。

18世紀末になると月齢にそった育児の手引きと病気の解説とを折衷したタイプの著作も登場してくる。ギルタナーの『子どもの病気と子どもの身体的育児』³³⁾はタイトルからも類推できるように、育児書と小児医学書を折衷したものであり、さながら今日でもみられるような育児百科のようなものだ。

ギルタナーは、生誕した日の病気として、黄疸や臍帯の出血、水頭症、足や背中中の奇形からはじまり、まず母親による授乳育児、次に乳母による乳母育児、そして母乳以外の栄養摂取、子守（世話）について、孤児の扱い、断乳と続き、1歳から3歳までにかかる病気、続いて3歳から7歳までにかかる病気の対処法が解説されている。多数の児童疾患が収録されているものの、子どもの月齢にあわせて紹介することで、育児の場面においての参照しやすさを配慮しているといえるだろう。19世紀初頭のアドルフ・ヘンケの『生後1年目の子どもの身体の育成ならびに病気の予防、知識、処置について』³⁴⁾も、ギルタナーと同様に月齢にそった疾患の説明という方法が採用されている。

ウンツァーの『医師』と医学知識の一般化

非専門家を読者とした育児書の特徴のひとつである利便性を考慮した医学知識の一般化を理解する上で、ヨーハン・アウグスト・ウンツァーが出版した雑誌『医師』³⁵⁾の役割は無視することができない。『医師』は、そのタイトルからもわかるように医学についての週刊誌

32) Georg Friedrich Hoffmann, *Wie können Frauenzimmer frohe Mütter gesunder Kinder werden, und selbst dabei gesund und schön bleiben?*, Frankfurt 1789, Vorrede.

33) Christoph Girtanner, *Abhandlung über die Krankheiten der Kinder und über die physische Erziehung derselben*, Berlin 1794.

34) Adolph Henke, *Taschenbuch für Mütter über die physische Erziehung der Kinder in den ersten Lebensjahren und über die Verhütung, Erkenntniß und Behandlung*, 2 Bände, Frankfurt 1810 本稿執筆のために参照したのは、1832年の版。

35) Johann August Unzer, *Der Arzt*, Lüneburg 1759-1764.

であり、毎週2, 3種の病気や怪我を取り上げ、その症状の見分け方から、疾患の経過、薬の調合方法や処置の仕方が解説されている。その発刊に際しての序文に明言されているように、『医師』は、あらゆる医学の最も有用な知を、「医学を専門としていない人」に伝えることを目的とした雑誌であった。

医学の門外漢に医学情報を伝えるために、ウンツァーはどのような方策をとったのであろうか。マティアス・ライバーの研究が明らかにしているように³⁶⁾、『医師』の記事には、ウンツァーの恩師や知人たちが執筆した専門医学書から採用された元記事があった。ウンツァーは、協力者を雇うことなく、ひとりで『医師』の原稿を執筆し編集していたことがわかっているが、専門書をわかりやすく翻案することによって雑誌の定期刊行を実現していたのである。

例を示してみよう。心気症を扱った記事は、ヨーハン・ゴットロープ・クリューガースの医学書が元ネタとして活用されていたことが文体の比較からわかっている。「次に頭痛に苦しむことになる。引き裂かれるような、締めつけられるような、圧迫されるような、ちくちくするような痛みが、しばらくは頭の前の方でそしてしばらくすると後ろの方に感じる。こうした痛みはしばしばあまりの激しさを伴うことにもなる、つまりいってみれば、頭がばらばらに飛んでいこうとするかのような痛みだ」。この心気症に由来する頭痛についてのクリューガースの文章を、ウンツァーは次のように書き換えている。「さて私の患者よ、頭の前の方でそして後ろの方で、引き裂かれるような、締めつけられるような、圧迫されるような痛みを感じるようになる。これらの痛みがあまりにひどくなると、まるで頭がばらばらに飛んでいくかのようなになる。」

クリューガースの記述では、症状の正確な描写をもとめて、頭痛の経過そして痛みの様態を詳細に列挙するような文体が使われている。またクリューガースの文章は全体的に構文も複雑であったが、そこをウンツァーは手際よく平易な文章に書き直している。そしてなにより重要なのは、クリューガースの著作にはみられない、「私の患者よ」という、読者への呼びかけを挿入して、読者の注意を促している点だ。こうした読者のとの仮想対話は、18世紀の読書熱を支えた道徳週間雑誌（*Moralische Wochenzeitschriften*）³⁷⁾においてよくみられるレトリックであったが、ウンツァーは、この道徳週間雑誌で多用されてきた手法を『医師』に取り入れ、読者の関心をうまく引き出そうとしている。

後年にウンツァーは、『医師』の記事から子どもの疾患に関連するものだけを選び出して、

36) Matthias Reiber, *Anatomie eines Bestsellers*, Göttingen 1999, S.133ff.

37) 道徳雑誌については次の研究を参照のこと。Wolfgang Martens, *Die Botschaft der Tugend*, Stuttgart 1971.

『子どもの養育と病気の治療』³⁸⁾としてまとめている。この序文には、専門外の読者を配慮する言葉が確認できる。「同じ症例で別の病気のこともあるし、同じ病気でも異なる症例をもつことがある」と、医学の専門教育を受けていない人にとって病気の判断が難しいことをウンツァーは心配している。そもそも雑誌記事として執筆されたものであるため、月齢に応じた配列をとることはできなかったわけだが、そこでウンツァーは、病名ではなく、「子どもが衰弱している場合」、「子どもが乳を吸わない場合」、「お腹をいたがっている場合」というような症例を索引に掲載し、読者が目的に情報にアクセスできるよう利便性を確保している。

このように知識をかみ砕いて伝えることと平行して、知識を一般化するためにウンツァーは別の方策もとっていた。ある号のなかで、雑誌『医師』の意義は次のように説明されている。「本雑誌の目的は、医師とは無縁の人々により信条を吹き込むことである。それは言い換えれば人々の心のうちにある、年老いた祖母から連綿とつたわる治療術を一掃することである。そのためにも、今回の記事ではまず最初に、生活様式や病気の処置に認められる害ある偏見を、多数の人々に示すことにしよう。とすれば将来かれらが私の助言に従わなかったようなことが起こるにせよ－私はそのことを恐れているのだが－自分たちには健全な理性が欠けていたという口実しか与えられないであろう」³⁹⁾。

読者が私のアドバイスに従って病気を処置することができないというのならば、それは読者に健全な理性が欠如しているからにはほからないという、読者への苦言ともとれるこの言葉に、医学の情報を分かりやすく伝えという試みが期待しうる成果をあげていないことへのウンツァーのいらだちを読み取ることができるだろう。「わたしがさまざまな病気についての治療法を、わかりやすく読者に伝えようと努力すれば努力するほど、かれらが病気の処置について正しく理解する前に、すべての教説は役立たないものになってしまう」⁴⁰⁾。ウンツァーは日々進歩する医学と、それを受け入れることに時間のかかる一般読者との間の溝が日々埋めがたいものになっていくことを案じていた。そこで医学の知識の伝播と平行して、ウンツァーがとった方策が、迷信が何であるかをはっきりと示すことで、一般読者をとらえてはなさい偏見や誤った医学知の一掃することであった。

知識の伝播と迷信の一掃をかかげたウンツァーの『医師』が大きな影響力をもっていたことは、出版統計からもうかがうことができる。『医師』は、リューネブルクのベルト書店から1759年から65年まで週刊誌として定期刊行を重ねた後、当時の雑誌ではよくおこなわれていたように、67年から68年にかけて本の体裁にまとめられて再販された。その翌年1769年に

38) Johann August Unzer, *Die Erziehung der Kinder und die Cur ihrer Krankheiten*, in: Ders., *Medicinisches Handbuch*, Lüneburg 1770. ただし本稿で参照したのはライプチヒにて1776年に刊行された第2版である (2.Aufl., Leipzig 1776, S.1-352)。

39) *Der Arzt*, 5.St. S.379.

40) *Der Arzt*, 5.St., S.380.

はすぐに改訂版が準備され、ライプチヒの書籍市の記録から3500部発刊されたことがわかっている⁴¹⁾。その後も1778年に改訂版が出版されている。69年の改訂版の出版部数である3500部という数字はきわめて異例のことで、この版だけで18世紀ドイツの書籍文化を代表するベルリンのニコライ出版の書評雑誌『一般ドイツ文庫 (*Allgemeine Deutsche Bibliothek*)』の最大出版部数2500部という記録を優にこえている。『医師』の成功の背景には、一般の人々の医学への関心の高まりがあったのは言うまでもないが、『医師』の成功によって、その関心はさらに大きなものになっていったはずだ。

『医師』の影響力の大きさを間接的に伝えているのが、『医師』に向けられた同時代の批判である。ウンツァーは、『医師』を通しての医療知識の普及がなかなか進まないことに苛立ちを隠さなかったが、『医師』の出版は、専門家ならざる読者自身による治療の実践を促進した。1766年のニコライの書評誌では、「生半可な医学知識がイカサマ治療師のようなものを生まないか、それは本当のイカサマ師と同じくらい危険なことになるのではないだろうか。また知識がひろまることで、患者が医師の診断に疑念をもつようなことになるのではないだろうか」⁴²⁾と酷評されている。『医師』は、医学の門外漢に専門知識を無責任に与えるものとして、批判的に受けとられていたのである。ライプチヒの医師プラトナーもまた同様の批判を繰り返している。プラトナーは『医師』を念頭に、「私はあらゆるこの類いの本に対して、次のような理由から反対している。というのも、こうした本は、医学の知識を広めることはなく、医学の知ったかぶり (Vorwitz) を人々にひろめるだけだから」⁴³⁾。

18世紀末になると、医学者ならざる者たちに、医学の知識を与えてもよいのだろうか、医学知の啓蒙そのものに自己制限をもうけるような動きも確認できる⁴⁴⁾。こうした一連の批判は、不正確な医学的知識が広まることを危惧するものであろうが、同時に、素人医師が巷にあふれることへの専門家の危惧、つまり医学の制度化ならびに専門化という大きな時代の流れのひとつの反応とみななければならない。育児書もまた、医学の専門化のプロセスがもたらした緊張関係のうちにあったことはいうまでもない。専門性に立ち入らず分かりやすさを前面にうちだした育児書は、親たちにどの程度まで医学知識を伝えるべきかをめぐって、執筆者が自己検閲した結果だったともいえるだろう。

ほとんどの育児書において迷信批判に重点がおかれているのもこのような理由によるのだ

41) Reiber, a. a. O., S.221.

42) *Allgemeine Deutsche Bibliothek*, 2.Bd., 2.St., 1766, S.53

43) Ernst Platner, *Briefe eines Arztes an seinen Freund über den menschlichen Körper*, 1.Bd., Leipzig 1770, S.349; Vgl. Reiber, a. a. O., S.247.

44) Vgl. *Der Arzt oder compendiöse Bibliothek des Wissenswürdigsten aus der Medicin für Nichtärzte aus den gebildeten Ständen*, Halle 1795-1796, hier 1795, S. 33; Vgl. Reiber S.244 ただしライバーが記載している頁数は誤っている。

ろう。医学的な知識を軽々しく提供することはできないが、とって誤った処置を放っておくこともできないからだ。主だって批判されているのは⁴⁵⁾、産道をとおってきて変形した新生児の頭のかたちを、出産直後に手で力をいれて直す行為や、泣いている子どもを寝かすために、アヘンに類するような強い睡眠薬を飲ませることなど当時の医学で誤っていると判断された新生児の扱いである。また妊娠時に妊婦が強い刺激を受けると、奇形児が産まれるという説⁴⁶⁾や、既に述べた新生児を布できつく包むことへの批判、病気とあらば吐剤と下剤の多用することも批判されている。そしてこうした批判は、迷信を継承する乳母や子守への集中砲火という形でおこなわれている⁴⁷⁾。シュトゥルーフエによれば、「迷信に満ちた子育てをするのは子守たちとりわけ年老いた子守」であり、迷信に満ちた子育てに対比されているのが、「理性と愛情をもって行動する母親」であった。子育ての迷信批判は、文字通り迷信の批判であると同時に世代批判でもあり、同時に子守や乳母などが属していた低俗身分への批判という形で繰り返されてきた。乳母や子守を排除して、母親だけによる育児をおしすすめる主張は、ジェンダーの力学とも棲合していたといえるだろう。

もちろんこうした一方的な迷信批判にストップをかける立場も存在した。正しい育児の知識を広めるためには、乳母や子守にこそ、正しい医学知識を与えるべきとするまっとうな意見を唱える育児書もあった。ヨーハン・ダーフィット・ブッシュの『地方の人々へ向けた子どもの身体育成について』⁴⁸⁾は、前書きで明言されているように、医師の少ない地方の住民に向けて、育児知識の伝達を目的としたものである。とはいえ記述の細かいこの本を、識字率の低い都市外の人々が実際に入手し読んでいたとは考えにくい。牧師たちが地域の妊婦や産婆らに読み聞かせたのかもしれない。

ブッシュの育児書は、妊娠中の生活一般、新生児の扱いと、扱っている内容の点で、他の育児書と異なっている点はまずない。しかしそのアドバイスの内容は、十分な医療をうけられない都市外ならではのものといえる。例えば乳児の栄養摂取について、生後3週間まではなにがなんでも母乳をあたえ、それができない場合は、3週間後からは、パンをふやかしたような粥を与えるという助言がみられる。この助言は、出産時また出産後の母体の致死率の高さを反映していると同時に、都市外で乳母を探すことの困難さ考慮した実践的な対処法であったといえる。そしてまた家庭薬の勝手な使用をきつく戒め、子どもの体調に異常があれ

45) たとえば下記の育児書は、こうした迷信的な育児を列挙し批判したものである。Johann Heinrich Müller, *Ueber einige Fehler der körperlichen Erziehung der Kinder*, Erlangen 1790.

46) Marschall, a. a. O., S.31ff

47) 乳母を批判する伝統的な理由は、母乳をとおして乳母の気質が新生児にうつるというものであったが、18世紀末になると、胎児は母体の中で母の血液から栄養を摂取していたのであるから、母親の母乳に慣れているというまことしやかな医学的な説明まで登場する。Müller, a. a. O., S.63ff

48) Johann David Busch, *Anführung des Landvolks zu der körperlichen Erziehung der Kinder*, 2.Aufl. Marburg 1794.

ば、できるだけ早急に医者判断をあおぐ努力をせよという立場を貫いている。それゆえ子どもについての疾患の対処や薬の処方についての記述は一切なく、親や乳母による医療行為をできるかぎり制限しようとしていることも読み取ることができる。

また産婆を読者とした育児書も存在した。1790年代になっても、産院の利用は大都市や大学都市だけに限定されており、しかも産院のない大半の地域での出産は、これまでどおり産婆によって担われていた⁴⁹⁾。また18世紀後半の産院は、正当ならざる性交渉でみごもった女性たちの出産場所としても機能しており、伝統的なキリスト教社会では罰せらる母子は、産科医養成のための生きた教材として利用されていたのである。また産科医の役割は難産時の鉗子分娩を施すことにあり、産院であっても通常分娩では産婆が立ち会うことが多かった⁵⁰⁾。

実際の出産を担う産婆に向けて書かれたのが、マーシャルの育児書⁵¹⁾である。出産後の子どもの状態のチェック、清潔さに気を配った産湯や産着へのアドバイス、温かすぎない子ども部屋と適切な部屋の換気、母親による母乳育児といったお決まりのアドバイスが続く。マーシャルの育児書の特徴は、前半部の産婆による妊婦の健康状態の把握についての記述だ。また出産後の妊婦のケア⁵²⁾についての記述も、通常の育児書にはみられないものである。児童医学と産科医学の専門知識がフィードバックされていることにあらためて気付かされてくれる。

マーシャルが産婆に認めているのは、脈診による初期の妊娠判断⁵³⁾、舌の状態⁵⁴⁾、触診による胎児の状態の把握、子宮からの異常出血のチェックである。胎児が7ヶ月未満の早産は危険であり、なるべく避けるようにとも注意がされている⁵⁵⁾。また死産については、「胎児死去の兆候については、産婆の修業で、すでに習得しているはず」⁵⁶⁾と、産婆が実践のなかで身に付けてきた経験にも一定の評価があたえられている。その一方で、軽微なものを除いて出産時の異常の対処には一切言及されていない。たとえば妊婦の体調不良で、瀉血をする場合であっても、妊婦の扱いを熟知している外科への助言をあおぐこと、「最も確実なのは、

49) 産婆から産院への移行は、19世紀を通じて緩やかに行われていた。Maria Metz-Becker, *Der verwaltete Körper*, Frankfurt am Main 1997.

50) Jürgen Schlumbohm, *Lebendige Phantome*, Göttingen 2012. この研究書で紹介されているFriedrich Benjamin Osianderが残したゲッティンゲンの産院記録を参照。

51) Heinrich Georg Marschall, *Unterricht zur Pflege der Ledigen, Schwangern, Mütter und Kinder in ihren besondern Krankheiten und Zufällen*, Offenbach am Main, 1789.

52) Marschall, S.112ff.

53) Marschall, a. a. O., S.3.

54) Marschall, a. a. O., S.10.

55) Marschall, a. a. O., S.66.

56) Marschall, a. a. O., S.76.

医者と呼ばにやること」⁵⁷⁾と説かれており、下剤はじめとする家庭薬の勝手な投与も、もちろんきつく戒められている。著者マーシャルもまた、専門的な医療行為と通常の出産とを区別しようとしていることが確認できるだろう。

マーシャルの育児書から読み取ることができるのは、迷信の固まりとして批判される産婆も、実際は、出産前後の母体の世話ならびに子どもの養育の相談役であったということだ。都市部以外の出産をとりまく状況を考えるならば、産婆を頭ごなしに出産現場から排除することなどできる、むしろよき助言役、ないしは異常を早期に発見する観察者のような役割をあたえられていたと考えたほうがよいであろう。

子どもの健康への配慮

専門家を読者とする医学書と異なり、一般読者を対象とした育児書では、子どもの健康の維持、そのために子どもの身体への配慮の重要性が、全面に押し出されることになった。医学知識の一般化を目的としたウンツァーの『医師』へ向けられた、同時代の医師たちの批判からも読み取ることができたように、医師による医学知識の専門化と医療行為の独占によって、育児書では疾患の処置についての記述が相対的に減少することになった。しかしそれは同時に、子どもの健康への配慮するという、新しい関心を読者である親たちに植え付けることになったと言えるのである。以下子どもの健康への配慮の由来と、この配慮が子どもと親のどのようなかわりあいをもたらしたのかという点から、考察を続けることにしたい。

子どもの健康とはいえ、健康の定義は時代によって異なり、おのおのの時代での人間の生理学的理解が前提となっはじめて定義可能となるものだった。医学史的なおおまかな整理を援用すれば、病気が神からの罰としてみなされた時代から、身体の気質のバランスを乱れを不健康ととらえ、その原因を気候（風土）や食事などの外敵影響に認める時代を経て、18世紀中葉になると、人間の身体になんらかの固有な力をみとめる生氣論的な身体理解を基盤に、人間の身体のなかに充満する体液の循環に着目し、その滞りを不健康の原因とみなすようになってきた。18世紀を通じて万病に対してほどこされたポピュラーかつ万能な治療法である、下剤、吐剤、浣腸、瀉血は、滞った体液の循環を促進するための処置であった。こうした不調をもたらす原因としてドイツでは伝統的に、精神にその原因をもとめてきたが⁵⁸⁾、18世紀後半になってスコットランドの医師ジョン・ブラウンの影響のもとヨーロッパを席卷したブラウン主義が受け入れられると、人間が受ける刺激に着目し、人間に元来備わっている生気が、刺激によって浪費されることで不健康を招くと生理学的に理解されるようになった

57) Marschall, a. a. O., S.55.

58) Vgl. Kurt Polycarp Joachim Sprengel, *Versuch einer pragmatischen Geschichte der Arzneykunde*, 5. Theil, Halle 1828.

た⁵⁹⁾。

このような時代背景のなかでカントが『諸学部争い』のなかで医学部の役割として認められた健康の維持、その代表的な論客でもあるフーフェラントの『長寿学』をはじめとするような養生を説く著作が次々とあらわれることになった⁶⁰⁾。フーフェラントによれば、体力そして身体器官があまりに早く消耗しないように、生気の消費を抑えることが健康維持といわれる⁶¹⁾。『長寿学』は、人間の身体に備わった生気をできるだけ浪費しないような生活を送るための諸注意をあつめたものだった。

この生気の浪費への警告は、18世紀の複数の育児書では、子どもに無駄な刺激を与えてはならないというアドバイスの形で登場してくる⁶²⁾。複数の育児書にみられる過剰なまでの温かさへの嫌悪、たとえば冷水浴⁶³⁾や薄着を推奨し⁶⁴⁾、部屋は決して温めすぎではならず、かまどのある台所に子ども寝かしておくなんてものほかという一連の注意は、刺激を抑制するためのアドバイスであった。これらのアドバイスは、暖かさは「生気消費を加速」させ、結果として「生気が枯渇する」という生気維持論⁶⁵⁾を下敷きにしなければ理解できないものである。

生気を無用な刺激で浪費することなく、節約するという健康論には、出費を抑えて家計を節約するという経済感覚がそのまま応用されている点が興味深い。家計維持する配慮は、そのまま健康を維持する配慮にもなる。つまり家計をやりくりできる人ならば、子どもの健康維持もできるというわけだ。このような経済感覚の横すべりから、育児書と家政（家計をはじめとする家の管理の諸々）を説いた一連の家長論（Hausvaterliteratur）とのつながりを

59) 18世紀ドイツにおけるブラウン主義についての研究は多数あるが、ドイツでの影響関係についての情報を提供してくれる研究として下記のをあげておく。Markwart Michler, *Melchior Adam Weikard (1742 - 1803) und sein Weg in den Brownianismus*, Leipzig 1995, S.62ff; Jörg Melzer, *Vollwerternährung - Diätetik, Naturheilkunde, Nationalsozialismus, sozialer Anspruch*, Stuttgart 2003, S.47ff

60) フーフェラントの影響について簡潔な見取り図をあたえてくれるものとして次のものを上げておく。Klaus Pfeifer, *Medizin der Goethezeit*, Köln 2000; Ortun Riha, *Diät für die Seele. Das Erfolgsrezept von Hufelands Makrobiotik*, in: N.T.M. Nr.9, Basel 2001, S.80-89.

61) Christoph Wilhelm Hufeland, *Die Kunst, das menschliche Leben zu verlängern*, 1.Bd., 2. Aufl. Jena 1798, S.177.

62) 妊婦も刺激をさけるべきとするアドバイスも多い。ホフマンは、節度をこえた激しい感情は悪弊をもたらすと説いている。Vgl. Hoffmann, a. a. O., S.96.

63) 冷水浴はほとんどの育児書で推奨されている。Vgl. Samuel Gotthelf Crusius, *Von den Mitteln Kinder zu gesunden Menschen zu erziehen*, Leipzig 1796, S.44.

64) フーフェラントも育児書を執筆しているが、そのなかで冷たい水で沐浴をしたとしても、沐浴以外の時間に、子どもを羽根布団に靴下のはかせるようなあたたかい環境にしているとしたり、それはやはり生気の消耗につながると注意している。Christoph Wilhelm Hufeland, *Guter Rath an Mütter über die wichtigsten Punkte der physischen Erziehung der Kinder in den ersten Jahren*, Wien 1799, S.6ff.

65) Vgl. Hufeland, a. a. O., S. 178f.

推察することができるだろう。出版史的にみると、家長論のほうが早い時期にジャンルとして確立していることから⁶⁶⁾、健康への配慮は、家政の近代化というより大きな社会的動向と関連付けて考察する必要があるにちがいない。

育児書が伝える子どもの健康への配慮は、温かすぎることなく風通しのよい居住空間へと子どもを隔離し、定期的に冷水で身体を洗い、数時間おきに授乳するという具合に、一定間隔に基づいた世話を提供することであったと言い換えることができる。健康への配慮とは、子どもの生活の管理化、つまりある決まった場所で一定間隔の時間で世話が繰り返す生活へと規律化することであったといえることができるだろう。もちろん管理され規律化されていくのは子どもだけではない、子どもたちの健康を維持するために、日々こどもの衣食住を配慮し続ける親たちもまた、子育てをする親へと自己規律化されていったのである。

しかしここで確認しておかなければならないのは、病や健康が時代ともに変化する表象であったように、育児書から親たちは子どもの身体を健康にする方法を必ずしも獲得した訳でもなく、また規律化された生活でもって子どもたちが必ずしも健康になったわけではないということだ。

ヨーハン・ゲオルク・フリードリヒ・ヘニングは、『いくつかの薬の価値および効果について』と題された育児および児童疾患書のなかで、「子どもたちの最初の養育について、とりわけその健康に関連して、たくさんの新しい試みが医師や教育者の間で実践されている」⁶⁷⁾と切り出し、乳幼児の養育ならびに健康をアツカった多数の書籍が出回っていることで、かえって育児や初期対処の混乱を引き起こしていることを批判的に指摘している。例えば「南ドイツと北ドイツの気候差はいうまでもなく、ロンドンやパリで出版された育児書をそのまま北ドイツで実践したところで、むしろ身体をこわすだけだ」。このような環境の違いを無視した育児の例として、帽子をかぶらせることなく、胸の大きく開いたゆったりとした上着に、脛のでる短いズボンでの育児を、ヘニングは引き合いに出しているが、ここには自然回帰を声高に唱えたルソー流の教育思想がドイツで盲目的に実践されていることを暗に批判しているのは明らかだ。

しかし上記の引用の眼目がルソー批判にあったわけではない。そうではなくヘニングは、翻訳をふくめた育児書の氾濫と、専門家ならばまだしも、一般の人々には、印刷媒体の形で流布している知識の適切な取捨選択ができないという弊害の指摘である。

更にここで、育児書が行っていた乳母批判や子守批判を重ね合わせてみる必要がある。乳母は、迷信の権化として厳しい批判にさらされていたが、出産ならびに子育てのよき相談相

66) Vgl. Philip Hahn, *Das Haus im Buch*, Epfendorf 2013, Theil II.

67) Johann George Friedrich Henning, *Beobachtungen über den Werth und die Wirksamkeit einiger Arzneimittel*, Stendal 1789, S.95.

手ではったはずだ。乳母や子守といった子育ての玄人を、子育ての空間から排除することは、当然のことながら子育ての素人化をもたらすことになった。

頼るべき伝統的な育児法を否定されてしまった親たちは、育児情報に翻弄されるしかない。「周りと同じ育て方をしているというだけでは、まちがった安心（falsche Beruhigung）でしかない。相変わらず、粥で子どもは大きくなったとか、育児について尋ねられた母親が、子どもはきつく布で巻くものだとか、女の子はコルセットをつけるものだとか言っている。このような風潮のなかで、どうやって別の方法で子どもをそだてたらよいというのか」⁶⁸⁾。もちろんこれは周りの意見に同調する迷信に満ちた育児を、批判しているのであるが、子育てについて過剰に配慮し、周りの人々に相談してしまう親、誤った方法とはいえ、周囲と同じ育て方をしているということで、安心感を得ていることの指摘である。まさに過剰なまでの迷信批判が迷信回帰をもたらしているという状況を、警告しているともいえるだろう。

同様に育児書を過度に信用することも問題であった。ザルツマンは、流行の教育として、果物や野菜を食べさせてもらえず、丸薬やハーブティー漬けの食生活を子どもに強いる親を紹介し批判している⁶⁹⁾。迷信にすぎない親も、育児書に頼りきりの親も、氾濫する育児情報に空しく振り回される親とまったく同じ、子どもの健康を配慮した生活は、親たちが、育児という答えのない労働へと駆り立てられている状態としかいえないだろう。

フーコーの生政治の議論を引き受けつつ、ドンズロは『家族に介入する社会』のなかで、18世紀フランスの家庭医学書と育児書（両者の区別はされていない）の出版増加、さらに家庭内での相対的な父権の弱体化をとりあげ、家庭に介入する医師とその介入の末端として働く女性（母）の役割を指摘していた。ドンズロにとって医学は、人々の生と国家の力とを発展させるような生政治的な権力の言い換えであり、社会における医師と家庭における母を経由して、社会と家庭とに生政治的な権力システムが浸透すると指摘している⁷⁰⁾。

ドンズロが指摘するような社会と家庭の医学化の流れに異論はないが、しかし18世紀に出版されていた育児書をひもといてみると、家庭の医学化のプロセスには、単純に医学知識の浸透させることとは別の力学が組み合わされていたことに気付かせてくれる。それは正解のない健康への配慮とでも言うようなものであった。ウンツァーは「生まれたばかりの子どもと老人は、死が支配する時期におり」、「自分たちのものEigenthum」⁷¹⁾とは考えられてはいない現状を批判していた。たとえばヨーハン・ヨーゼフ・ネールは『なぜほとんどの子どもは死んでしまうのか、また大きくなった子どもの多くは不健康なのか』というショッキング

68) Struve, a. a. O., S.5.

69) Salzmann, a. a. O., S.200.

70) ジャック・ドンズロ（訳：宇波彰）『家族に介入する社会』新曜社 1991、pp.18ff.

71) Vgl. Unzer, *Medicinisches Handbuch*, S.57.

なタイトルの育児書の冒頭で、「ロンドンでは半数以上のこどもが3歳までに死去、プレスラウでも14歳の誕生日をむかえられるのはやはり生を受けた子どもの半分にすぎない」⁷²⁾と、子どもの致死率の高さについて言及している。ネールの統計の正しさについてはここで検討しないが、子どもの不健康とりわけ死は身近なもの、死が望むならば、親たちは子どもの命を、黙って差し出さなければならなかったのである。そこで医学知識の啓蒙を企てたウンツァーは、死を黙って受け入れるのではなく、死は育児をする親にこそ原因があると主張した⁷³⁾。子どもが健康であるかどうかは、親の子どもの健康への配慮次第であるという、子どもの健康にという新しい関心事が、育児書を通じて浸透したわけである。

親たちは、子どもを不意に襲う病気や死への恐怖に煽られながら、そして同時に、「子どもは母親的に扱われなければならない」⁷⁴⁾と、自分たちを母性愛という子どもへの愛情をもつ生き物として自己規定して、「聖なる義務」⁷⁵⁾としての子育てへと、自らを引きずり込んだことになる。シュトルーフェは、子育てを母親だけでなく父親にも認められる義務と位置づけるが⁷⁶⁾、育児書は、子どもの死への恐怖ならびに母性的愛という植えつけられた本能を動員することによって、親子関係ともいう新しい人間関係を育んだといえるだろう。ここで再度、乳母や子守への批判を重ね合わせてみれば、子育ての場面に親以外の介入を排除する育児書は、子育てを通じて親と子だけからなる核家族化をすすめたもといえるだろう。

教育書と医学書と部分的に重なる育児書は専門書ではなく、育児に不慣れた親たちのために書かれたものであった。そしてこの育児書を通して、子どもの健康を配慮する親という自己規定を与えられることになった。このような育児書の性格や役割が明らかになることで、次の課題も提示される。育児書は医学史のなかに位置づけられるのと同時に、家族や親子関係の絆となる母性的愛ないしは親子感情の態度変化をひろく根付かせた著作としても分析しなければならなくなる。とりわけ比較検討しなければならないのは、健康維持の領域へと入り込んだ、節約や儉約といった経済感覚の問題である。家計運営と健康管理が家庭に持ち込まれることによって、家庭という人間関係の場がどのような変化を被ったのかという大きな視点から、かつての育児書を分析する必要があるだろう。

72) Johann Joseph Nehr, *Warum sterben die meisten Kinder, und warum sind viele von denen, die groß werden, ungesund?*, Mühlhausen 1788, S.3f.

73) ヨーハン・ペーター・フランクは、子どもの致死率の高さを、出産時の産婆の不注意にあると批判している。Johann Peter Frank, *Abhandlung über eine gesunde Kindererziehung nach medizinischen und physischen Grundsätzen für sorgsame Eltern, besonders für Mütter, denen ihre und ihrer Kinder Geundheit am Herzen liegt*, Leipzig 1794, S.2.

74) Struve, a. a. O., S.26.

75) Frank, a. a. O., S.37.

76) Vgl. Struve, a. a. O., S.19.

Erziehungsliteratur und Familie als ihre Leser:

Gattungsmerkmale der physischen Erziehungsliteraturen für Kinder aus dem 18. Jahrhundert und ihre Rolle in der Entstehung der modernen Familienbeziehungen.

Kotaro YOSHIDA

In dieser Abhandlung werden Gattungsmerkmale der physischen Erziehungsliteratur für Kinder aus dem 18. Jahrhundert erörtert; zu jener Zeit also, in der sie sich zu einer publizistischen Gattung ausgebildet hat. Die physische Erziehungsliteratur wird in der Forschungsgeschichte, z.B. bei Kunze (1971) oder Frey (1997), hauptsächlich im Zusammenhang mit der Entwicklung der sozialen "Hygiene" untersucht: Hier spielte sie eine Vorreiterrolle als Vermittler der hygienischen Praxis in der allgemeinen Lebenssphäre, besonders in der Familie als einer Sozialeinheit. Die vorliegende Studie jedoch verfolgt einen anderen Ansatz, indem zuerst die damaligen Rezeptionsumstände in Betracht gezogen werden. Die Erziehungsliteratur lasen hauptsächlich Eltern, die keine Fachärzte oder Erzieher waren, um für die Erziehung der Kinder Rat zu bekommen. Aus dieser Hinsicht ergeben sich zwei Merkmale der Erziehungsliteratur im 18. Jahrhundert: Die Inhalte wurden für ein besseres Verständnis der Eltern verallgemeinert und ihre thematische Ordnung für eine leichtere alltägliche Benutzung umstrukturiert.

Im Verlauf des 18. Jahrhunderts steigt die Publikationszahl der physischen Erziehungsliteratur für Kinder an. Es ist jedoch fragwürdig, ob diese Publikationen den Eltern umfangreiche Kenntnisse über die Kindererziehung vermitteln konnten. Meines Erachtens bewirkte diese Literatur einen anderen Effekt. Neben Ratschlägen für die Kindererziehung enthielten die Werke auch Warnungen vor Kinderkrankheiten und Tod. Mit diesen Informationen ermahnte sie die Eltern dazu, die Kindererziehung als ihre Pflicht anzusehen.